

日本人の自己中心的視点と翻訳・通訳について

内山 浩 道*

Portrayal of the self-centered mindset of Japanese and the perspective of Japanese expressions in English translations

Hiro UCHIYAMA

In an attempt to describe the effect of the self-centered mindset of Japanese and perspective in Japanese expressions, the following features are analyzed:

1. The obscuring of the subject, using examples from Kawabata Yasunari's *Snow Country and The Izu Dancer*.
2. The perceiving by the agent of effects caused by inanimate subjects in English.

はじめに

この機会をいただき、私が講義してきたこと、また、研究してきたことに関連させて、「日本人の自己中心的視点と翻訳・通訳について」という演題でお話をさせていただきます。

日本人の自己中心的発想が織り込まれている短文を引用して、それらを英語に訳すことのむずかしさについて述べます。また、客観的な視点に基づいた英文例を日本語に訳す試みも行いたいと思っております。

1. 『雪国』の冒頭文

国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。

川端康成、『雪国』の有名な冒頭文。トンネルを「抜けた」主体は何なのでしょう。列車なのでしょう。それとも主人公の乗った列車、いわば、小説の主人公なのでしょう。列車と捉えた場合の視点と主人公の“私”と捉えた場

合とでは、視点の位置が異なります。

日本文学研究で有名なサイデンスティックさんの英訳では、「抜ける」の主体は列車として捉えています。

The train came out of the long tunnel into the snow country.

(*Snow Country*, Vintage International, 1996, p.3)

述部は“went into the long tunnel”ではなくて、“came out of the long tunnel”となっています。このことから視点がトンネルを抜けた後に置かれていることがわかります。それを裏付けることとして原文にある“国境”という語句が訳されていません。トンネルを出た後での視点では、新たな状況の展開が強調され、過ぎ去って行った“国境”としてのトンネルの存在意義などは問題にされていないわけです。「国境」という言葉が「トンネル」という言葉の前に置かれたのは、その言葉に何か託するところがあったはずなのに、その原作者の本意は否定されていま

す。翻訳者の視点はトンネルを出た後の状況の展開に置かれているからなのです。

一方、原作者の視点がトンネルに向かう時点からの状況の展開に置かれていたという仮説は、日本語のシンタクスの面から実証できます。「抜けると」の「と」は先行条件の必然的な結果を表すことばです。「春になると桜の花が咲く」というふうに、「と」は結果の予測性を伴います。「国境のトンネルを抜けると」の「と」は雪国に入る前の先行条件を示す働きがあるのです。

また、「雪国であった」の「た」は、過去のある時点からの潜在的な期待や予感が先行したことを表す働きを持っています。田んぼにトキがないかを見回している人が眼前描写として述べる、「あっ、トキがいた」の「た」の働きと同じだということですね。「雪国であった」の「た」は、前方に迫る長いトンネルを抜けたところに雪国があるだろうという、潜在的な期待が先行したことを表しているのです。

トンネルに向かう視点は、外界の状況を主体者の目に、そして心の中に取り込んだ視点です。その視点からは、前方に迫る長いトンネルを境にして、状況の一変した世界、雪国があるだろうということを予期します。そしてトンネルという“国境”を抜けると、予期したとおりには雪国が控えていたという状況の変化を認識したわけです。トンネルは雪のない世界と雪の世界の境を象徴し、それを「国境」ということばで表したわけです。したがって「国境」という語の存在意義は極めて高いものだと判断します。

2. 「私」を中心に据えた外界の諸現象

日本語では、「私」と「外界」との対峙において、対象から受ける働きを“自分の事として”捉えます。「私」を中心に据えて、外界の諸現象を、自身の目や心に映る現象として、わが身の側か

ら捉えます。対象から受けた働きを、わが身の側からとらえた現象描写では、主体が何であるかいちいち述べる必要がありません。このことは、「雪国」の冒頭文の例で見たように、主体が曖昧で、的確な把握が困難なケースを生み出します。

そこで、もうひとつ、川端康成の「伊豆の踊り子」の中の一文を見てみましょう。

はしけはひどく揺れた。踊子はやはり唇をきつと閉じたまま一方をみつめていた。私が繩梯子に捉(つか)まろうとして振り返った時、さよならを言はうとしたが、それも止して、もう一ぺんただうなづいて見せた。はしけが帰って行った。栄吉はさっき私がやったばかりの鳥打帽をしきりに振っていた。ずっと遠ざかってから踊子が白いものを振り始めた。

下線部の「さよならを言はうとした」というのは一体だれだったのでしょか。次の英訳文をみてみましょう。最初は再びサイデンスティックカーさんの訳です。

[1] The lighter pitched violently. The dancer stared fixedly ahead, her lips pressed tight together. As!; started up the rope ladder to the ship I looked back. I wanted to say good-bye, but I only nodded again. The lighter pulled off. Eikichi waved the hunting cap, and as the town retreated into the distance the girl began to wave something white. (Seidensticker, *The Izu Dancer and Other Stories*, Charles E. Tuttle, 1974, p.28)

[2] The launch rocked violently. The dancing girl kept her mouth shut tight, staring at the same spot. When!; grabbed the rope ladder

and looked back, she tried to say good-bye but gave up and merely nodded one last time. The launch headed back to the wharf. Again and again Eikichi waved the hunting cap I had just given him. As the launch receded in the distance, the dancing girl began to wave something white. (Holman, *The Dancing Girl in Izu*, Counterpoint, Washington D.C. 1998, p32)

サイデンスティッカーの英訳では、「さようならを言はうとした」のは“Iwanted to say good-bye”となっている通り、主人公自身ですね。一方、②のホルマンの訳では、“she tried to say good-bye”となっていて、“she”すなわち「踊子」となっています。さて、どちらが正しい訳なのでしょうか。この二つの英訳文を日本語に直すと次のようになります。

- [1] 私は私が縄梯子に捉(つか)まろうとして振り返った時、さよならを言はうとした。
- [2] 踊子は私が縄梯子に捉(つか)まろうとして振り返った時、さよならを言はうとした。

「私が」の「が」という助詞は、「さよならを言はうとした」以外の人物を排他的に指定する働きがあります。したがって「私」以外の人物が候補となるので、「踊子」ということになって、②のホルマンの訳が正しいということになります。日本文学研究ではドナルド・キーンさんと並んで著名なサイデンスティッカーさんでさえも、対象から受けた働きを、わが身の側からとらえた現象描写の解釈には、相手手こずられた御様子です。

3. 行為者としての無生物主語

3.1 さて、今度は客観的な視点に基づいた英文を、自己中心的な視点に基づいた、日本人の感性に合うような日本語にするには、どんな問題があるのか見てみましょう。行為者としての無生物主語の扱いを中心としてお話しします。次の文章はオーストラリアのある旅行業者のスピーチの一部です。

- ① A **shortage** of seats which limited the number
S
of Japanese tourists who are able to make the
trip prevented even more spectacular **increase**
V **O**
that would have created more employment
opportunities.

会議通訳者になるための訓練を受けている人が同時通訳しました。なお、スピーチの原稿は、慣例に沿って少なくとも一週間前までには同時通訳者に渡されていたはずですが、大体つぎのような訳出でした。

海外旅行に出かけられるはずの日本人旅行者の数を制限した座席の不足は、雇用機会を更に促すことが想定された旅行者の飛躍的な伸びまでも阻止してしまいました。

この叙述は、視点の自己中心性を重んじる日本人にとっては理解しにくいものとなっています。具体的には次のようなことがあげられます。

- (1) “座席の不足”が“阻止してしまいました”とあって、無生物の主体が行為した。
- (2) “座席の不足”が“旅行者の数を制限した”

といて、無生物の主体が行為した。

- (3) 英文の下線部が先行する語に膠着した状態で訳出され、右のほうから左のほうへ、いわば、逆戻りの訳出となっている。

3.2 それでは、以上の3点を克服して、主観性を重んじる日本人の感性に合うような訳出が可能なのでしょうか。行為者としての無生物主語の用法については、クワークという学者が *Comprehensive Grammar of the English Language* という英語文法書の中で若干取り上げていて、これが参考になります。

クワークは主語の機能に関する説明のなかで、次のようなことにも触れています。

- a. ある出来事を引き起こしてしまう、その原因をさし、一般に無生物である。
例：The avalanche destroyed several houses. (雪崩が数軒の家屋を破壊した。)
- b. 行為者があるプロセスを引き起こす際に使う道具で、一般に無生物をさす。
例：A stone broke his glasses. (石がその人の眼鏡を割った。)

Quirk, R. et al. (1985, p.743) *Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.

このクワーク理論を応用することによって、行為者としての無生物主語の英文を、日本人に分かりやすいように和訳する手順が導き出されます。

- 1) S を原因・手段を表す副詞構文に変換する。
- 2) O を主語にする。
- 3) V は原因・手段と結果の因果関係を表すものにする。多くは自動詞または受け身で表す。
(例) The **avalanche** destroyed several houses

→ 雪崩で家屋が数軒倒壊した。

A **stone** broke his glasses. → 石でその人の眼鏡が割れてしまった。

- (a) A **shortage** of seats **limited** the number of
S V O
tourists who are able to make the trip.

クワークは、“of” でつながる名詞句の叙述に関して、順送りばかりでなく、逆戻りの叙述方法も提唱しています (Quirk et al. 1985, p.1278)。“a shortage of seats” という名詞句では、shortage という名詞が short という形容詞から派生した言葉なので、「座席が足りない」ともっていったほうが主観性を重んじる日本人の感性に合いますね。そこで、「座席が足りない」という陳述に原因を表す表現をつけると、全体の叙述は順送りのアウトプットとなり、日本人の感性に合います。

- (訳) 座席が足りないために、旅行に出かけられるはずの日本人観光客の数に限界が生じた。

- (b) A **shortage** of seats **prevented** even more
S V
spectacular **increase**.

O
(訳) 座席が足りないことから、観光客が飛躍的に増大していく見込みはなくなった。

- (c) A more spectacular **increase** would have
S
created more employment **opportunities**.

V O
「観光客が更に飛躍的に増大する」と、「雇用機会が更に増える」ことの因果関係を表すた

めに、順送りのアウトプットを試みましょう。

(訳) 観光客が更に飛躍的に増大したら、それによって雇用機会も更に増えることが想定される。

3.3 以上の (a) (b) (c) の英文を繋ぎ合わせると、①の文章を構成します。

- ① A **shortage** of seats which limited the number
S
of Japanese tourists who are able to make the
trip prevented even more spectacular **increase**
V O
that would have created more employment
opportunities.

(訳) 飛行機の座席が足りないことから、旅行に出かけられるはずの日本人観光客の数に限界が生じ、外国人観光客が飛躍的に増大していく見込みはなくなっていました。外国人観光客が更に飛躍的に増大していたら、それによってもって雇用機会も大幅に増大したことでしょう。

3.4 文頭から文末に向かって、順送りの訳出をする通訳術は、特に英語から日本語への同時通訳では効果的です。客観的な描写に基づく英文メッセージは、名詞句などによる膠着性を帯びる傾向が強いので、早めに日本語へのアウトプットをする必要があるからです。日本人独特の、自己中心的な意識の流れに沿うような通訳あるいは翻訳はこういう高度な技術を必要とするのであります。

4. 曖昧な意味合いのことば：「こんど」

もう少しお時間が残っているようですので、微妙に曖昧な意味合いを持つ日本語のことばに触れてみます。

「こんど」という言葉は事態の繰り返しのなかで話し手が任意に指定した近い未来の時間です。

4.1 「こんど 遊びに来てくださいね」

日本人の婦人に「こんど、うちに遊びに来てください」と言われたのだが、いつ伺ったらいのか、と留学生に相談されたことがあります。これは外交辞令のようにも感じたので、先方からの日時指定を待ったほうがよいと言っておきました。

同じように、親しい間柄では、「**こんど**いっしょに飲みましょう」と言いますが、それを本気で受け止めることはしないはずです。

「こんど 遊びに来てくださいね」での「こんど」は、二人が会うという事態の再現が期待される第一未来を指しますので、英語では、“**please drop-in one of these days**” というのが妥当でしょうか。

4.2 「**こんど**着任いたしました小沢でございます」

「こんど」は繰り返し現象のなかで、事態の再現が近い過去に起きたということも表します。以前からくりかえされてきた職員の配置転換の最新の事態を指します。英語では次のようにしてどうでしょうか。

“**My name is Ozawa. I was recently appointed to this position.**”

4.3 「**こんど**の列車」 vs 「**次**の列車」

乗物の出発表示のなかでは、「先発」、「次発」という表現は発着の序列を基準にした認識に基づいたものですね。ところが、駅によっては「こ

んど」「つぎ」という表記を採用しているところもありますね。さて、「こんどの列車」と「次の列車」を英語に訳すとなると、両方とも“the next train”とするわけにはいきません。

「こんど」については、先に触れましたように、繰り返し現象のなかの、任意に指定した近い未来の事態を指します。電車の発着が繰り返されるなかで、駅のプラットフォームに着いて、「こんどの列車」という出発表示を認識した時点から最も近い未来に起こる列車の発着を指します。先発列車を基準にした認識ではないというところがポイントです。列車発着の序列とは関係なく、利用者側に立っての言い方でして、日本人の自己中心性を尊重した表現なのであります。英語では、“the next train”でよろしいでしょう。

「つぎの列車」はどう英訳しましょうか。「つぎ」ということばは序列のなかの任意の一点を基準にして、それにすぐ続く対象を指します。ですから出発表示板の「こんど」「つぎ」「そのつぎ」という表記上では、「つぎ」とは「こんどの列車の後の列車」ということになります。英語では、“the next train after the next” 或いは、“the following train” となりましょう。

因みに、「そのつぎの列車」という表示の英訳は、「こんどの列車のつぎのつぎの列車」の意味ですから、“the next train after the next after the next” となりますが、これは長すぎますね。“the subsequent train” というのはいかがでしょうか。

それにしても、公共の場の表示に至るまで、日本人の自己中心的な視点を尊重した表現が使われているということは、日本におけるメディアの奥の深さを示しているように感じられます。

5. “Give and Take” Expression (授受表現) の主体について

5.1 「与える」vs「やる」: “Tom gave his mother a watch.”

この文の日本語訳は話し手と、Tom ならびに his mother との人間関係によって使用語句が異なります。話し手と Tom との間に親交関係がなければ、「トムは母親に時計を与えた」

話し手と Tom とが知り合いなら、Tom の母親に対しての行動を“話し手の側”の行動として伝達します:

「トムさんはお母さんに時計をやった」

話し手がトムの母親と面識があるなら、彼女に敬意を払って、「やった」の尊敬語「あげた」と言って彼女に敬意を表します。

「トムさんはお母さんに時計をあげた」

「やる」ないし「あげる」は本来、一人称の行為を表すことばです。それなのに「トム」という三人称の人物が“やった”、“あげた”と表現するのは、「トム」を「私」の位置に置いたというわけでした。“話し手の側の者”という意識での扱いです。本来、外の対象であるはずの人物が、内の者として、「われわれ」扱いになり、「私」と「トム」という一体感から出た言い方です。

5.2 「教えてあげます」vs「教えます」

さて、ここで、個人的なエピソードを持ち出すことをご容赦ください。実は私どもの次女がオーストラリアのブリスベン・ガールズ・グラマースクールに通っていたころのことでした。Bilingual に育った娘はオーストラリアの子どもたちに日本語を教えるアルバイトをしてみようと思ったみたいです。そこで生徒募集をするために近くのショッピング・センターの掲示板に貼る生徒募集の掲示を書き、それを私に見せて

くれました。キャッチフレーズは日本語と英語の両方で書いてありました：

“I will teach you Japanese”：「日本語を教えてあげます」

私は娘に日本語のほうの表現がおかしい、「日本語を教えます」のほうがよいよと言いました。これからオーストラリア人に日本語を教えようと意気込んでいる娘は当然ながらその理由を知りたがりました。「あげます」と「やります」ということばには、自分がある行為をして、その結果相手に恩恵を授けるという意味がこめられている。英文の“you”は不特定多数の、知らない人たちなので、「教えてあげます」と言って、わざわざ恩を売るような言い回しは馴れ馴れしく聞こえる。一方、「お父さんが君に日本語の間違いを教えてやろう」とか「教えてあげよう」というのは、それは、いいんだよ。君はお父さんからみれば身内の人間、自分側の人間なのだから、密接な感じが出るじゃないか。と、そういうようなことを言って説明しました。

5.3 「もらう」vs「くれる」

「やる」ないし「あげる」は自分側が人に恩恵を施すのに対して、自分側が人から恩恵を受けるという意味合いを含む場合は、「もらう」ないし「いただく」並びに「くれる」ないし「くださる」があります。では、両者の使い分けはどのようになっているのでしょうか。

次の文を「もらう」か「くれる」のどちらかを使って和訳してみましょう。外で遊んでいた5歳の息子がチョコレートを手を持ってうちに帰って来て、母親に向かって次のように言いました。

“Mum, a man gave this to me.”

日本語訳は二通り考えられます：

- a. 「お母さん、男の人がこれくれた」
- b. 「お母さん、男の人にこれもらった」

bの「もらった」は自分を主とした言い方です。自分の置かれた状況を弁明するにはこの言い方が効果的でしょう。aは出来事の意外性、行為者に関しての意外性が強調されています。“a man”は“知らない人”ということなので、人間関係の親密度は希薄で、意外性の含みがあります。ここでは、外で遊んでいた時の意外な出来事が強調されているとして、aの訳出が適当だと思われま

す。もうひとつ、「もらう」か「くれる」のどちらかを使って次の文を和訳してみましょう。5歳の息子がチョコレートを手を持って幼稚園から帰って来て、母親に向かって次のように言いました。

“Mum, my teacher gave me this.”

日本語訳は二通り考えられます：

- a 「お母さん、先生がこれくれた」
- b 「お母さん、先生にこれもらった」

aは出来事の意外性、行為者に関しての意外性を強調しようとするときに成立します。bは自分を主とした言い方で、自分と先生との親密さなどを得意げに伝達しているようで、bの訳出が妥当だと思われま

5.4 「いただく」vs「くださる」

ある出版社が頼みもしないのにある商品のカタログを送ってきて、後日、電話で次のように尋ねてきました。

「例のカタログをご覧いただきましたでしょうか」

そういう物言いをされると、「見なくちゃい

けないの？」と反発したくなります。「ご覧」も「いただきます」も聞き手を敬って自分がへりくだった言い方、いわゆる敬語なので、感情を害することはないはずなのに何がいけないのでしょうか。理由は「いただく」は「もらう」の謙譲語で、ともに自分を中心とした言い方だからなのです。自分の視点、自分の都合から捉えた質問をしているからです。こういう物言いは日本人が好んで用いるのですが、英語では表現しにくいです。カタログを見るのはこちらの行為、話し手側から見ると相手の行為なので、日本語であっても相手を主にした言い方、「くださる」を用いるべきです：

「例のカタログをご覧くださいませでしょうか」

「くださる」ということばによって、与え手からの恩恵が自分に向けられるという待遇意識が加わり、相手と自分との人間関係が前面に押し出されます。そのことを英語ではどのように表したらよいのでしょうか。

“I’m wondering if you had a chance to kindly look at that catalogue for me at all?”

この英文は、日本語に表されているように、相手の行為を対自己との関係で評価するという姿勢を強調しています。しかしながら、欧米人は通常“自己の視点”から捉えた立場で文を表すことはしません。自己の視点を抜きにして、客観的に状況を表します。そのように考えますと、“kindly”と“for me”は削除した英文が自然だと思われれます。

“I’m wondering if you had a chance to look at that catalogue at all?”

5.5 「もらってやってくれる」

「やる」「あげる」、「くれる」「くださる」、「もらう」「いただく」という表現は、恩恵や利益

の授受を表すことばで、話者の意識が極めて濃厚に表れる言い方です。聞き手となる相手や、話に登場する人物や物事と自分との関係などを、常に自己の視点から捉えて内容を伝達します。

4歳の女の子が保育園でお絵描きをしました。いつも同じような絵なのですが、またもう一枚お爺さんにプレゼントしたいとのこと。そこでお母さんはお爺さんに次のように言いました：

「お爺ちゃん、お絵描きを一枚もらってやってくれない？」

このような言い方で頼まれると、毎日同じような絵をもらっているお爺さんですけど、つい愛想よい返事をせざるをえません。それはどうしてなのでしょう。

母親の言葉には「もらう」「やる」「くれる」と、恩恵の授受を表す表現が、なんと三つもあります。三つともお爺さんを主体とした言い方にはなっていますが、「もらう」と「やる」では、お爺さんの位置に自分の視点を置いて、そこから身内のよしみを促そうとする、甘えの意識が見られます。

さて、「お爺ちゃん、お絵描きを一枚もらってやってくれない？」を英訳するとすると、どこまで「もらってやってくれない？」のニュアンスが出せるのでしょうか。次の二つの英文では、(b)のほうが、押し付けがましいところが表れています。

(a) **“Won’t you take one of her drawings, Grandpa?”**

(b) **“You will take one of her drawings, won’t you Grandpa?”**

「やる」「あげる」、「くれる」「くださる」、「もらう」「いただく」という人間関係が色濃く表れる表現では、「私は」とか「あなたは」とか、

きちんと述べなくても、行為や意識の主体が何であるか理解できるわけであります。

おわりに

終わりにになりました。本日は、翻訳、通訳の学習を通じて、英語と日本語の本質を学ぶ契機が生まれるのだということ、また、日本語も英語も、言葉の仕組みとといいますか、シンタクスを学ぶことが、言語の学習には大変重要であるという思いを、皆様にお伝えしたいという気持ちでお話させていただきました。言葉の本質を追求すれば、言葉の実用性を向上させることにつながるという思いがあります。その思いから、言葉の実用性を重視する教育に走るあまり、言語の仕組みを学ぶ機会がなくなってきている昨今の風潮に危惧の念を抱くところでもあります。

最後になりましたが、グローバル・メディア・スタディーズ学部のますますの躍進、そして御出席の皆様の御健勝を祈念して、お礼のことばにかえさせていただきます。ありがとうございました。